

|      |                                                       |
|------|-------------------------------------------------------|
| 会議名称 | 県立中井やまゆり園改革アドバイザー会議                                   |
| 開催日時 | 令和7年7月29日（火）13時00分から16時45分                            |
| 開催場所 | 波止場会館 1階多目的ホール                                        |
| 出席者  | 佐藤議長、渡部副議長、小西委員、隅田委員、野崎委員<br>上野委員、高原委員、中西委員、名倉委員、羽生委員 |
| 問合せ先 | 障害サービス課 支援改革グループ                                      |
| 会議概要 | 以下のとおり                                                |

**【議題1 福祉的な検証について】**

**（県立中井やまゆり園における医療・健康問題改革委員会）**

- 改革委員会中間報告にあるPDCAによる改善について、プランも大切だが、何が正しいか常に問うという意味では、振り返りや考察をしていくチェックがどう行われているかが大切である。
- 改革委員会の議論を経て、試行的に実施しているエラー&グッドプラクティス・レポーティングシステムについて、報告件数が増えていないことが課題である。また、職員間の気づきや記述内容に変化がないのであれば、報告の仕組みや報告への評価や奨励も必要である。
- 報告した内容が、現場職員の無関係な中で分析され、フィードバックされる形式であると、当事者性が欠けてしまう。本来は分析や振り返りは現場レベルで行っていく必要があり、現場サイドで振り返りできる仕組みも検討していく必要がある。
- 迷ったら報告を挙げるとしないと件数も増えない。何が重要か報告後に判断すればよく、まずはどのようなものでも報告していくべきである。
- 医療現場における医療安全においては、報告者がエラー、インシデント、アクシデントの区別はせず、受け取る側が判断する。また、匿名である。
- 福祉施設と医療機関は分けて考えるべきだが、報告を発信できる文化、環境づくりは共通して大切である。
- 長い時間軸の中で起きた問題と日々のひやりはっとは分けて考えるべきであり、エラーやひやりはっとは片付けるべきではない問題が山積している。
- 長い時間軸の中で、日々の積み重ねで、機能が欠落していつてしまうことが課題であり、このシステムによって、そこが見えなくなってしまうようにしないといけない。

**（福祉的な検証の進め方・検証にあたっての意見交換）**

- 過去の死亡事例において、急性期の対応に至るまでの日々の支援において、健康を害するような不適切な対応がなかったか、これまで振り返ることがなかった。
- 福祉的な検証は、社会情勢、生活史（活動・エピソード）、医療的な面の3つの視点から、ひとりの人の人生を長いスパンで見て、支援の在り方を振り返るこ

とが非常に重要である。

- 利用者の暮らしぶりや、豊かさ、生活の質を視野において、本人を取り巻く環境がどうだったか考えていく必要がある。
- 利用者の日々の変化や異変に気づく力が必要であり、日々支援に当たっている福祉側から医療側に、正しく伝える必要がある。
- 検証は、医療につなぐことについての福祉的な観点として、なぜこのような対応になったのか、気づくことができなかったのか、資料だけでなく、関係者からの聞き取りもできればよい。
- 長い時間軸の中で、身体機能が低下していくことを含めて、その人の生育歴・生活史から検証していく必要がある。
- 健康といのちは繋がっていて、栄養を摂らないと体重も減るし、支援と食事の観点では、利用者が食べないから食べさせないのは違うと思っている。どうやったら食べてもらえるか工夫が必要で、ひとつの物事だけで支援を決めてはいけない。
- 長い本人の人生において、本人の意思が尊重されてきたのかどうか、意思決定支援、共生社会、当事者目線といったことを基軸に置いて、歴史も含めて、検証を進めていく必要がある。
- 利用者が食べないから食べさせない、本人の言ったとおりにするということが意思決定支援であるという誤解があり、それは支援の放棄である。
- 検証は、施設の在り方や意思決定支援を問い直すことになる。

## 【議題2 アクションプランについて】

- 令和7年3月のアドバイザリー会議を受けて、アクションプランの改定を進めていくことを事務局から報告。
- 本年度がアクションプランの計画最終年度であるため、成果の見える化を図るための評価について、次回以降の会議で議論していくこととした。